

令和7年度 大泉西小学校・学校評価について

1 自己評価結果

(1) 概要

本年度の学校経営計画は、「規範意識の定着」や「他者意識の醸成」において顕著な成果を収めた。保護者アンケートでは「社会のルールやマナーを守っている」との回答が約94%であり、縦割り班活動は、児童アンケートで「仲がよい」との回答が圧倒的多数を占め、保護者からも「学年を越えて友情を育めた」と高く支持されている。

一方、最優先課題である「学力保障」と「自己肯定感の向上」には依然として課題が残る。学力保障では「算数が楽しい」とする児童が目標の90%に対し一定数「楽しくない」層が存在し、教員評価でもドリルパークの実施体制や副担任の指導従事にバラつきが見られる。自尊感情については、保護者アンケートで「自己肯定感が高い」とする肯定的回答が約74%に留まり、児童アンケートでも「自分のよいところ」を「わからない」とする回答が散見される。

安全管理面では、概ね高い評価（肯定率約92%）を得ている。反面、教職員の指導レベルや対応の差、連絡手段の煩雑さについても改善要望が出ており、次年度は組織的な指導力の平準化と、より丁寧な家庭連絡体制の構築が不可欠である。

(2) 根拠となる資料（評価は◎高い水準で達成 ◎概ね達成 ▼未達成としています）

具体的方策及び目標		評	自己評価結果 (保護者・児童・教員アンケートの主な意見等)	自己評価を踏まえた次年度の改善策
(1) 取組目標 子どもに夢と気概を育む	「教えて褒める」基本原則に基づき、学習意欲を喚起する。各学期末アンケートで「褒められて嬉しかった」児童90%以上を目指す。	▼	教員の自己評価では「達成できた」とする回答が多いが、児童アンケートでは「あまりできない」とする回答もあり、教員間での指導水準や認識に差異が見られる。	教員研修の方法を抜本的に見直し、管理職による日常的な授業観察と即時指導を通じて、全教職員の「褒める指導」の質と認識の平準化を図る。
	担任・副担任が学期に3回以上、将来の夢を問い掛ける。	○	多くの学級で達成されたが、一部の学級や専科教員において「達成できなかった」「や達成できなかった」との評価があり、取組に濃淡が生じている。	職員会議終了後の時間を活用したモニタリングを徹底し、教職員が絶えず意識して児童へ問い掛けを行えるよう組織的なチェック体制を強化する。
	年度末の児童アンケートで「将来の夢がある」児童90%以上とする。	◎	児童アンケートで「あります」と答える児童が多数派であり、保護者アンケートでも約86%が肯定的（思う・だいたい思う）に評価している。	今年度の取組を継続しつつ、高学年で夢や希望を保持し続けられるよう、各学級の実態に応じたキャリア教育の視点を取り入れた方策を策定させる。
(2) 取組目標 自尊感情を高める	各種コンクールに在籍児童の70%以上を応募させる。	▼	低学年や特定の学級で「達成できなかった」とする評価が目立ち、学校全体としての推進体制に課題が残った。	コンクール応募の意義を再確認し、担当教員を指名してそのリードの下で組織的に作品応募を促す体制を構築する。
	年度末の児童アンケートで「自分には良いところがある」児童80%以上とする。	▼	児童アンケートで「わからない」という回答が散見され、保護者アンケートの肯定率も約74%に留まっており、目標値には届いていない。	児童の長所を日常的に認め、励ます場面を増やすとともに、保護者に対しても児童のよさを積極的に伝えるなど、家庭と密接に連携した取組を推進する。
	暗唱活動（一人3作品以上、学級平均8作品以上）の推進。	◎	殆どの学級で達成されており、校長室での暗唱テストなど全校的な活動として定着し、児童の自信に繋がっている。	暗唱が進んでいる児童を学校だより等で紹介し、意欲をさらに向上させるとともに、モニタリングシートによる進捗管理の統一性を図る。
(3) 取組目標 集中力と持続力を醸成	水泳・逆上がり等の体力目標の設定と期末のモニタリング実施。	▼	全校で統一した目標設定や、月1回の継続的なモニタリングが不十分であった学級が存在する。	年度当初に体育主任を中心に原案を検討・周知し、学年単位で具体的なステップを策定するとともに、モニタリングシートへの記入を徹底する。
	生活アンケートによるいじめ・トラブルの解決率100%。	◎	チェックシート等による定期的観察が着実に実施され、認知した事案については組織的な対応により概ね解決が図られている。	「いじめ発見・対応マニュアル」の遵守を継続し、全教職員がチェックシートの読み合わせ等を通じて微細な予兆を逃さない観察眼と対応力を維持する。
	年度末保護者アンケートで「安全への配慮」肯定的評価90%以上とする。	◎	肯定的な回答が約91.8%（思う・だいたい思う）となり目標を達成したが、裏門の施錠等への不安の声も寄せられている。	施設点検の徹底（特に門の施錠確認）を継続するとともに、保護者が不安に思う点について迅速に情報を上げ、改善・説明を行う受信体制を強化する。

する			
(4) 基礎学力を保障する	取組指標	▼	ドリルパークへの取組自体は行われたが、副担任の指導従事が殆ど実施できなかった学級が多く、体制面に課題がある。
	成果指標	▼	児童アンケートで「たのしくない」層が一定数存在し、教員の自己評価でも「達成できなかった」とする回答が目立ち、学力向上への課題が残った。
	タブレット端末の日常的活用と使いこなせる児童	○	週2回以上の活用は概ね達成され、児童のスキル向上も見られるが、活用の記録・共有化や機器の不具合への対応に課題がある。
(5) 他者意識を育む	保護者アンケート「あいさつ」「ルール」に関する肯定的評価90%以上。	○	「ルール」は約94%で目標達成したが、「あいさつ」は約87%であり、定着にはあと一歩の努力を要する。
	縦割り班活動の充実とメンバーへの親しみ90%以上。	◎	教員・児童双方の評価が極めて高く、異学年交流の成果が保護者からも高く評価されている。
	児童アンケートで「相談しやすい」教員の割合(担任85%、副担任70%以上)。	○	担任については目標を達成しているが、副担任への相談やすさについては教員の自己評価でも「達成できなかった」とする層があり、課題がある。
			専科教員を含めた副担任の役割分担を明確にし、専科主任が状況把握と改善を主導することで、全校体制での指導従事を実現させる。 「大泉西小版・算数指導計画」に基づき、習熟度に応じた弾力的できめ細やかな指導を徹底するとともに、ワークテストの結果を即座に指導改善に活かすサイクルを確立する。 ICT担当を中心に活用状況の共有化を図るとともに、端末の不具合への迅速な対応と、より「新たな文房具」としての日常的活用を深化させる。 挨拶の習慣化に向けた取組を自己申告書に位置づけ、教職員が率先して範を示すとともに、地域・家庭と連携した声掛けをさらに推進する。 現在の良好な取組を継続しつつ、運動会などの行事とも連動させ、さらに児童の主体的なリーダーシップを支援する工夫を取り入れる。 副担任制の意義を全教職員で再共有し、専科教員や管理職も含めた複数の視点で児童を見守り、寄り添う体制を再構築する。

2 学校関係者評価

【総括】

結論：今年度の学校評価は適切である。

① 成果

- ・縦割り班活動を通じた異学年での児童同士の関わりがとても大切であり、児童自身も相互に仲が良いと感じている。児童の将来を見据えた活動として、今後とも大事にしていてもらいたい。

② 課題

- ・「自己肯定感」が低い傾向は残念ながら数年変わっていない。自宅でも我が子から「もっと褒めてほしい」と言われたことがある。他人に対する関心をもたないと今後の地域でのつながりや子供たち自身の生き方にも影響すると思われる。難しい課題である。

② 改善策

- ・自己肯定感を高めるキーワードは「関心をもつこと」ではないか。これは本地域の課題と同じように感じる。是非、小さいうちから他者に対する関わりを大事にした教育活動の展開と基礎学力の定着に向けた教員の授業力の更なる向上を期待している。

3 次年度の学校改善に向けた校長の見解

校長として、以下のことについて学校改善を行なっていく。

第一に、「全ての児童への学力保障」である「教えて褒める」基本原則を全教職員の共通認識として再徹底し、大泉西小版・算数指導計画に基づいた、突発的な事態にも揺るがない強固な指導体制を再構築する。

第二に、「信頼の向上」である。保護者の皆様が安心して子供を預けられる環境を整備するとともに、家庭とのコミュニケーションをより円滑かつ丁寧なものへと刷新する。

本校のステークホルダーである児童、保護者、そして地域の皆様の満足度（CS）をさらに高め、全ての児童が誇りをもって「なりたい自分」を語り、自らに価値を感じて生活できる大泉西小学校を創り上げるため、校長自らが先頭に立ち、不退転の決意でリーダーシップを発揮していく所存である。